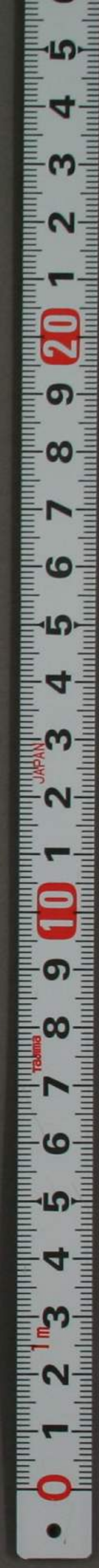


三七
全傳
南柯夢
編最
四

曾
600
29/1



三七全傳
第二編

古夢南柯後記卷之四

前卷第四

東都

曲亭馬琴編次

池の中鳴乃上

因果觀面の陰り。誰うこれをありのざらんあれども一旦の利小引れ慾小
 まうひ不覺又禍胎を醸すとたれ長又毒を流し子孫その餘殃を
 受く又隣べし。されば赤根半六か如た陽く領主の驕奢をたどけて陰
 小あのが榮利をいかり。米谷山ある霊木を伐りし。その身猛小蕪跡
 たれども憂苦又横死せし。のるらど。一子半七也。又流浪し。ねれ女の
 むれ名を立られ。やうやう天日を觀る。更又続井家の長臣とある。の
 ち。今亦罪ある罪を得る。うら歎く。いあらねども。その子後の
 半七も小墓あるも罪をまう。百折千磨の艱苦を経る。縁故

百折千磨 己二二〇

たつやうをえらるゝ現獵夫ホがいの違ふつくとあふや。風流士の大刀
 の失たる吉山（吉山）のふも量りしけれど。昨夕標本の松原よとありしと
 いひ今又ら小鋤盤を捨れば。人ありしらの塚を。蕪れたる小疑ひは。
 去らるゝ彼宝刀のづから失りし。飛きたるりの飲曼も亦志るがら。彼
 彼姓火西を投り。飛失たりといふよと。再々尋思するゝ。陰の
 大刀風流女の大内殿の長巨たる。陶晴賢が家とあれば。陽の大刀。風
 風流士られを慕ひし。遂に周防山口。飛あれたるよ。あらぬ飲推量を
 りて。あひ決がごとく。風流士の失たる余よ。身は罪被りて。あ
 禍はあひあ。君を異は在る。元未願の所あり。左はあ。あひ
 右小就てあふ。村上親実が。ひつるを。著明けれど。あつと
 うらも騒ぎ。遂に村長獵夫ホを。山をわらんとするに。忽地後方

刀物の倒る音地。御音。要皆うら。又。彼
 彼碑石よせら。楠の断株が。あつと。倒し。不思儀と
 くれ先よ。熟視。石よ化たり。断株。只一夜。朽ち。老木
 老木の立枯。西の。倒。幾。碑。現未曾有の
 り。半之進。左右。碑石の。二ツ。村長が宿所。丹。骸を。山寺。墓。米谷
 米谷。怪。平城。告知。村長。後者ホを。第三日。亭。平城。倒。小。密。告。宿所。大
 小。密。告。宿所。大。倒。伊賀

順勝その報を審み又はさす。下よびの疑ひ忽ち面よ
 怒氣をあらわし。局録ふす。藤立まほ。やをれ羊之進木精塚の
 碑石の原是楠の断株るれ朽て倒るるものあべ。件の大力の矢たり
 とのめ全く汝が虚言あらんおりのに汝も曾太郎と同意し。予を
 諫んといひみ。事の用ひられざらんをちる。あは一言も争わど却
 曾太郎を狹し。順勝を賺してこの結構をうらみ。曾太郎之面を
 ころしとどめうを匿む。諫たれ。その罪詩をべ。汝の弁侮し。主
 を欺く。その罪決して詩がう。と纏懸りたまたつ。怒り堪え
 ちん佩刀の鞘よをむけて替も棄てく罵りあ。當下順勝の内室
 玉枕御前の殿のい。敦圀あ。声の生平あらぬが公り。と女童し。常
 えてとれと遣らひあう。やが更きり。つ。如此と報知を常

ちの山をあらぬ。遠侍のこま。おひつ正廳の廊下身を隔り。あ
 ちうをせと坐したる。目今順勝の怒り堪え。と刀の鞘よをむけ
 あを胸窺て吐嗟とをう。きり。襦をわ。用。羊之進を後方
 小田て右を著。君志が怒を押し。ころら。か。う。を。せ
 君のあん憤。さ。ゆ。れ。も。の。羊之進。羊七たり。當初君のあん
 を身よ負。百折千磨の艱苦を経。ら。の。ゆ。ら。び。や。加藤家の家
 う。あ。り。て。大國豊。民安。彼が切。ゆ。め。れ。あ。う。は。一口の
 宝刀よ。ひ。え。て。む。ら。移。る。棄。あ。世の識人の時。今眼前
 が如けん。只舊功。あ。百。を。れ。枉。詩。を。あ。言。諫。正。く
 諫あ。烈火の如。順勝も。當然理よ。と。只疾視て。坐。せ。か。ま。り
 ち。細。復。つ。扇。を。あ。て。袖。う。ち。扇。だ。人。あ。の。始。め。り。終

あつりの稀に渠奴が父羊六を編蓬の中より獲跡て五條の縣守を
 うけあつり。刺渠奴の近臣の列に入らるるをきく。名を取り。衣を具
 さんとあひらば予が恨を補ひぬららん。今に至りては渠奴既に家の家
 だんが。つゆあつりも不足り。をきりて。権を賣り。主を蔑る。そのかきめ
 豈ちかぬの如く。此度の罪に決して免れぬ。玉枕が
 の所も又黙止し。宿所に罷置して内籠を再々。下知を等罷り
 立。と呵々あつり。羊之進の唯々。後とあつ前を退たり。このとき
 蟻松曾太郎の羊之進がゆかりとあり。殿の御気色の不をいませらん。と
 潜又遠作よきり。その内体を洩はさ。胸苦しく。羊之進
 の恙あり退せよけれ。が。ぶ。これを飲び。せ。さ。す。傍人あり。羊之進
 羊之進の頻々嗟嘆。風流士の宝刀紛失。たれの吾情。愁。米谷。と
 自殺す。小。阿容。と。ゆ。罪。被。らん。元。未。覺。悟。の。あり。り。
 の。只。今。殿。の。あ。ん。ま。移。る。ら。ん。あ。孤。忠。の。越。を。書。遺。せ。一。封。懐。よ。け。り。
 君。君。を。賣。さ。す。や。よ。曉。あ。ひ。て。宝。刀。の。ゆ。立。地。よ。ど。ひ。絶。あ。り。や。も
 あるべし。小。玉。枕。御。前。の。と。め。さ。せ。あ。め。を。り。と。ひ。の。の。一。度。あ。ら。ど。
 ひ。づ。ら。あ。り。り。風。流。士。の。失。た。る。子。吉。凶。定。め。あ。り。れ。ど。も。君。君。愛
 情。の。あ。ひ。を。絶。あ。ら。ん。禍。の。穢。ひ。が。あ。ん。と。い。ひ。り。て。
 懐。小。を。さ。し。彼。送。書。を。い。揚。る。よ。竹。処。遺。た。り。ん。終。小。え。さ。び。
 殿。の。あ。ん。前。の。あ。ん。ま。の。懐。あり。と。あ。ひ。物。を。り。彼。処。や。遺。らん。今。更。よ
 彼。一。封。を。あ。ら。れ。な。ら。ん。実。り。と。あ。あ。い。て。さ。か。く。小。ら。つ。説。欺。る
 と。の。さ。か。め。の。朽。を。り。た。り。り。と。殊。更。よ。周。章。と。曾。太。郎。の
 事。越。を。さ。す。且。尋。思。い。る。赤。根。や。と。の。愁。ひ。あ。る。い。邊。必。死

あつりの稀に渠奴が父羊六を編蓬の中より獲跡て五條の縣守を
 うけあつり。刺渠奴の近臣の列に入らるるをきく。名を取り。衣を具
 さんとあひらば予が恨を補ひぬららん。今に至りては渠奴既に家の家
 だんが。つゆあつりも不足り。をきりて。権を賣り。主を蔑る。そのかきめ
 豈ちかぬの如く。此度の罪に決して免れぬ。玉枕が
 の所も又黙止し。宿所に罷置して内籠を再々。下知を等罷り
 立。と呵々あつり。羊之進の唯々。後とあつ前を退たり。このとき
 蟻松曾太郎の羊之進がゆかりとあり。殿の御気色の不をいませらん。と
 潜又遠作よきり。その内体を洩はさ。胸苦しく。羊之進
 の恙あり退せよけれ。が。ぶ。これを飲び。せ。さ。す。傍人あり。羊之進
 羊之進の頻々嗟嘆。風流士の宝刀紛失。たれの吾情。愁。米谷。と
 自殺す。小。阿容。と。ゆ。罪。被。らん。元。未。覺。悟。の。あり。り。
 の。只。今。殿。の。あ。ん。ま。移。る。ら。ん。あ。孤。忠。の。越。を。書。遺。せ。一。封。懐。よ。け。り。
 君。君。を。賣。さ。す。や。よ。曉。あ。ひ。て。宝。刀。の。ゆ。立。地。よ。ど。ひ。絶。あ。り。や。も
 あるべし。小。玉。枕。御。前。の。と。め。さ。せ。あ。め。を。り。と。ひ。の。の。一。度。あ。ら。ど。
 ひ。づ。ら。あ。り。り。風。流。士。の。失。た。る。子。吉。凶。定。め。あ。り。れ。ど。も。君。君。愛
 情。の。あ。ひ。を。絶。あ。ら。ん。禍。の。穢。ひ。が。あ。ん。と。い。ひ。り。て。
 懐。小。を。さ。し。彼。送。書。を。い。揚。る。よ。竹。処。遺。た。り。ん。終。小。え。さ。び。
 殿。の。あ。ん。前。の。あ。ん。ま。の。懐。あり。と。あ。ひ。物。を。り。彼。処。や。遺。らん。今。更。よ
 彼。一。封。を。あ。ら。れ。な。ら。ん。実。り。と。あ。あ。い。て。さ。か。く。小。ら。つ。説。欺。る
 と。の。さ。か。め。の。朽。を。り。た。り。り。と。殊。更。よ。周。章。と。曾。太。郎。の
 事。越。を。さ。す。且。尋。思。い。る。赤。根。や。と。の。愁。ひ。あ。る。い。邊。必。死

を究めあぐろ。そのつと稱む彼又ゆりあふ。稀ある忠義を皇天の憐れ
 あふああるべし。あつらひ今もあらざりて。殿のちん前へ送たる一封の猛き
 むらろをわゆるふとがとあらんもあべくぐ長途の勞も推量らる。三接
 半七園花母子もむ苦しく袖つあらん。退りあへと慰まハ羊之進を
 ちつらあづふ。はと起し。人間萬事塞翁が馬吉もすと定ぬを
 凶れぬぬしといひあぐ。くろくまをこれの閑居の罪人安危理乱を助る。
 君を輔佐しとあられといふつ身を外ゆ。主のまど忠臣の
 言のまどあてあられ。る程は三勝園花羊七平作亦も父小後ひる。
 米谷(赴)たりし私平奴隸が物あつらふ。事のまらうあつら殿の
 気色いり小坐とらん。か家公の恙あり。疾退りあへ。と君所のりを
 うら膳仰合りく。と物統たる小羊之進いり憂る気色もあ。罷つり

小つれハ妻も子共もそのほより小園居し。いりみくと酒小あれど。あ
 程をびひもあらせど宝刀の失たる。うの後者亦も夢はらん。の憐れ
 して勸氣を蒙り。くより親居る。再との君命をもちあふべし肯
 を仰られより平作のまふるれども。笠松の家を續たれば。さるおん答
 今。園花めらとも立ちりて。あふある日ハ母小事(又)あ。只の君は事と父が
 宿所へ立入るべりぐ。この肯らるゆゆと叮嚀し説示せ。平作ハ扇を笏
 小つらるほ。仰せけあつひひぬ但標本の松原より。家々の轎子(鉄
 炮を打ちけ丹三を救ぢ。癖者のえ未怒を會ひりの致され疑がべし殿中
 り。そのりのを捕捕ら。宝刀の往方成ある。うあらん小。あつらとこの
 趣をすえあ。あふらざりしと真だち。用ハ羊七も父がほより小小膝をす
 平作がまらう。所程小をゆ。あん牙小枕をささんりの。どひあつらあ



君命を速く
曾太郎
半七を捕ふ

可成り

南木行言卷四

曾太郎

半七

半七之進

南河後已卷口



半七
八海池の
中
流



南河後已卷口

後乃復寛かひくろ華格を慕ひたり。夏牙のあまひあり。
 されば申七のこの五七日。夜も通骨移つねに勝断は神勞れ老る
 松が根枕ありて。寝るとも志は臥しり。か。夜風のそよと牙は入る。
 驚き立て身を起せば。月の人や暮を星光也。初更の比とお母したよ。
 申七が孝糸天女納受をひく。彼首の岩ふ繋る舟の木のづら
 續解てや。風も吹ぬあるがれ来て。いつの宿ふる鳩根ふあり。申七今
 此舟をんて。いつぞうも勇がさん。念願成就疑ひはと跳り蕙て。閃々と
 うらやふ。其知とも志はぬ如法圍夜ぬ棹を操り。水を撻率くして
 毎天の舟へ乗著て舟を岩よ繋る。久探りつ。清み登りて。天女の
 作堂よ請る。神燈のつと暗けき。湖上の月を仰ぐ。煩悩の
 雲忽地煙霧て。闇浮の其基よゆるた。信公併肝小徹して。
 感涙を拭ひぬ。志は廣前小額著て。又母の安養祈念
 する小暗れた女子とお母。一声のとははよけ。申七大さふ
 驚き怪し。其処よ。何人ぞ。と問ふ。声を笑き。つてや。その申七
 ぬ。よとる。初花は。つりと。意て。や。り。又問ふ。言の
 葉も只泣た。やうこそあめ。と申七。神燈の光よ。就て。左見
 右見。且バ。分る。また。云号の外。後母女。初花あり。ど。ひ。け。様
 深。や。く。又。い。よ。も。あ。り。且。し。て。形。を。改。め。お。ん。玉。枕。前。に
 給。る。一。なる。暇。あり。とも。夜。を。こ。めて。人。氣。ある。この。築。塔。ふ。た。や
 ひ。と。り。籬。り。と。る。ん。ご。う。の。が。り。吾。儕。中。は。本。因。徒。と。り。し。り。
 絶て。又。母。の。音。聲。聞。え。む。と。入。室。刀。を。進。ず。と。百。日。の。限。り。
 哭。き。つ。つ。あ。る。り。の。入。る。と。あ。ら。が。志。して。と。問。が。や。く

世のその後の世もそいしてと背向もえせと面背のひのみの断り極
 断ふひてぞ祈る結願の今宵もくはるの川堂までおん牙はあひ
 辨財天女の償さのよやばくせん。そものうらぐ彼れう水と流る
 諸のひし。おのがまの迷ひより。抗格のほどまて。真の丈まのぬ
 うと疑へば又今更ま怖さ嬌と挿ませてまの退れり。伏沈めま七
 びて歎息し結ぶのまのこの嬌まらねども。生涯その牙とあるせん
 づいものびこそめくまふ。おをる。物諸女ふとく夜を犯し。
 七びびく通つんと浮る。亦馬とくおゆるえど赤の志れらる。
 くれ由又親とく牙と忘ま。辨財天女と遥拜して又の厄難
 除るあぶく。檀首の舟とく寄せ一扇系流る。むゆと夜は水は
 垢離と執禱の日数に化またちてけの下の日の徒候絶命。天女由

感納しぬぬ軟とと苦しと涙をせしん。勞きて小雲時目睡程よ
 舟の中流る流る。原素念願空しゆ。とやぐ飛る小舟ふ
 棟しとまある川堂へ詣ま。そくはる由吾妹子小環会つ縁由と。
 同は又これお等し。階は系る丹誠苦ゆひあせ給と合るん。誠
 災厄消除疑ひる。まゝあれど。武士の家おはる男女の私席を
 共よせん。おのれ因後におん牙も又病ありとて。肩よ給と
 るがら。笑と裁て階出こく流るのまら。吾橋と真愛苦は相法と。
 今ある人ありと。おのれ。岩もりのお世の談後ふりこれと。お
 親の罪をちりてあらん。どりく下向志あり。これおんや退ると。
 ついつとを引とえて。頃月の夜の長。暮せま。同のまらりのこと。
 誰は行く。牙るれりや。さく連く。たらあふ。會話とせゆ。う。

年より弱く見えぬと慰めんといふお母さだや。おん身は今茲二十一の
 森あるまゝに年の浪よりおとすおの娘も。あゝて膝に君と
 くれ。ひとりよりうらぶ浦島が一夜に齡老ぬとも。何ううらみん衣
 従ひ縫ん待汁の待つ。あゝ娘さううらから。つとつと脚きては
 つれよあゝ移るや。遠面へえもまご。おん身はこそこれをおりのめ
 コレハ又親のよきと念するあよけいすも。結さうりける婚姻を後
 きてくまご。かくのこらへん情を。ええとぬりのと恨もせんが。親よ
 代らば死をとも辞せむと。果は妻ありてあつては情ぬ命も惜みて
 見苦れ死さむと。只身ひとりのおまて。かゝる祥のまたとをうけれ
 縁と時節をまらぬといつて。まごは泣き。身をうらむりりも

傷らぬと。孝行とこそ。愛するあ。やま多しの為。あつと。もの。死
 める。紙考と。さう。こら。は。よ。の。恨。あ。らん。云。早。う。の。妻。て。あ
 りの。紙。婚。姻。を。紙。紙。と。ま。ま。と。や。い。と。強。面。と。怨。む。れ。ば。半。七。と
 今更。あ。い。の。腹。を。言。の。な。も。勅。は。ま。ま。う。紙。う。り。浩。如。ふ。前。面。の
 樹。立。の。間。より。燈。燭。の。ま。り。閃。と。さ。う。生。つ。前。の。滑。石。の。枕。枕
 り。を。右。左。の。靴。う。け。つ。る。燭。照。不。途。を。照。さ。せ。築。嶋。の。互。橋。を。
 斐。然。と。足。音。を。う。く。つ。と。ま。ま。と。玉。枕。清。前。の。な。は。ま。る。
 からん。と。六。時。ま。ぬ。物。諸。の。ひ。が。け。と。ま。ま。初。花。も。周。草
 辟。隠。ま。ん。と。ま。ま。も。只。一。條。の。氣。集。嶋。の。れ。の。橋。より。外。の
 路。も。ま。ま。と。ま。ま。と。胸。う。ち。發。び。び。さ。ら。と。何。と。
 い。と。ま。ま。と。ま。ま。と。い。け。り。

申せり。今さうふんごんや。申せし中。清小因縁とありしと
 變るふ。けふの百日ふ及びやまさん。月額の長うありたる友秋浪
 風は吹曝まゝる友秋浪ふふ倍と宴る。又初花の病者あり
 とて給事を断りまゝ世その日より。うんく。と同世まゝひの外は
 おこりてや。溜ひてこゝ詣らる。やよ淫奔りの。口親今さよ
 吹えまゝさる。うんけまじ。曾太郎ふいふとぞ男女の密通の
 重た禁断とまゝつもの。法を犯と。そのあるまじ。死するれども。
 こゝろ久くあゝ絶てる。恨みあゝぬ。まゝのあれど。申せ親
 たるもの。生死存亡定るらば。その身中因縁とありらる。ら。
 溜り水と流。浪と越。こゝへかゝる。もの。何たの。この乱淫
 密会不承とやせん。不孝とやりらん。絶えんと。心為あゝ。

初花も又まゝつと。し。外父の洞窟を。外。女。の。堂へ。ま。と
 入。ま。壘。場。を。撮。り。な。る。その。罪。障。は。百。世。流。む。流。の。は。し。と。ら
 じ。や。この。の。君。よ。吹。え。あ。げ。ま。彼。ホ。兩。人。が。う。の。こ。と。半。之。進。ま
 一家滅亡。曾太郎も又まゝつと。の。あ。い。じ。ま。れ。ば。彼。ホ。か。え。う。道。を
 ある親抱見身中。被。ま。ご。る。鬼。と。あ。り。ん。軟。悼。て。も。ち。母。悼。む
 今。抑。ま。ら。な。か。の。小。堂。へ。月。毎。ち。集。る。何。の。為。ぞ。君。さ。ま。ら。こ
 家子老堂。凡。俗。内。は。あ。ると。の。青。人。草。の。末。ま。も。安。う。れ。の。こ
 祈りしりの紙所。由。多。ま。ま。の。冥。空。を。推。ま。さ。う。は。は。男。女。の
 命。と。断。ば。天。女。と。恨。ま。ま。ん。ら。ね。か。え。と。脚。ん。生。の。ま。さ。ら。ん。と
 ん。よ。彼。ホ。も。又。親。の。子。と。淫。を。樂。み。迷。ひ。を。執。り。ま。ま。會。せ。し。ま
 あ。ま。あ。れ。ど。い。い。訣。あ。り。と。も。い。い。解。み。う。ら。り。具。初。花。の。



辨天

花

半七



辨天
鳴子
賢夫人
家法
正く
と

玉枕伊前

曾太郎

なるくうへ。す七ふ云号て給奉の年春満るの婚姻と
 結せんと状どもい豫てよう。准儀とあると致すつるともあり
 くと。まご君の免許をばざれば。夫婦あり。いひがごとし。そ
 脱まぬ罪人さるべや。初花の稚さより。己のが使ふ女の子
 られば罪定んと勿論る。半七のつふせん。徳も己の任せん
 家の家つる曾太郎の何とらとよ。つと人と憐む理非明白
 かる婦人の世は多く。有がたきまてよ。赤た仰ありとも。恋ふ
 身を悔えらむ。む怪女見より。親はち長く面も。脱まぬが
 身の恥を挿ふあやう。袖の露胸さいつて。塞りて畏りつつか
 ぬと。且く曾太郎の塵うち拂ひて膝不置巻と握り肘を
 張り。淫奔めのもうけもつり。致。凡そ侍女房達と。

武士の女見のそみあけ。或は坊賈浮浪人。或は村長農丈
 るんどの。女由孫もあざけれ。武家不給る。それバ礼義正く。
 上さぬのり。凡習て。物の善悪由辨る。汝亦ハ続井の譜代
 家の政事を奉る。親も終て憚る。主と悪まぬ大膽不敵。
 この年春の奉公。何ん習て。その能なる。殊更不才七々。
 閑居え。親の大難。その身由配所。ありあら。又の生
 死の際。あけふ至。配所を脱出。女子を伴ふ。放蕩非法
 あり。その身を八裂。創さる。そて由親の恥辱。罪贖ふ。あ
 け。由。是。今。も。あ。れ。ま。し。進。む。緯。の。卦。を。傳。ふ。由。あ。ら。う。腸
 熱て怒。通。り。つ。ふ。あ。ら。ん。これ。も。う。そ。て。親。の。名。を。統。さ。る。を
 縁。と。四。翼。の。白。綾。お。よ。説。く。も。釋。と。理。健。の。主。親。の。

仰ぐ重き身の懐ふませ七のや幸難し。頭を擡思ふ身由
 親の窮難にかかる人はさし打忘ます。女子を伴ひゆんやまるる
 とも配所を裁てての中堂へ来りし科の脱んとまるるとも脱まる
 かくの初花の病を忍び外父の厄難消除の為に竊ふこへ
 諸の抄をたらすべくと此と逢ぬ。さればその罪もませしまる怪く
 やあんといひつ傍をさんまる初花と目を拭ひませぬふ
 過のりまるる裁度を許さるる彼首の恥を吹よせて驗
 見せるるとそ天女を初念もひい。誠をたておのづら舟中へ
 寄りしらぶのよろこびとまるとそこの清めひらるる身を
 忘る由親の為と紙控とおり長の初花を罪をかくませ
 ぬを許さるる初花の女子の身の懐もいればの軽し。

只ませ七か首紙刻て助べくこの女子紙といへば果ど曾太郎も
 血をしる眼を声も尖くしらぶる品定め罪輕くとも重くとも
 賞罰の君の隨意其紙汝はま同のんや後密命をせばといふも
 柳下惠はあらうせばいつぞの聽さるる密文淫婦ハ輕重乃
 沙汰も及ぶ覺期せよといつ罵り。肩衣の腹引延しる形を改め
 地をと著君主人へまじなる願ふ罪人も紙曾太郎もあらうふ
 立地は首紙刻あらう後よの裁を殿に報知なん偏は許させ
 ぬら。と遮袋親の子ともらふ。母生和とせどとまの慈悲と
 玉枕前のひくらと改を掉ひなるる許さるる最重き
 罪人ハその場を去らせば刑さるると続井の家風なるるの婦女子
 ぬれともぬれよまる。あらうとも天女の中堂近く血を擡さるる。

其の崇脱をがけけん。よりてその罪人ホのそか。かきふ。あの
 池の柴浸みせん。如此とると。たの氣法を破る。天女の巾堂
 も穢さす。至る。彼の者。彼りのど申の事。死してあらん
 ぞん。人死とんが。君とある。す七初花が。魂この池。あふ。漂んとれ
 う。う。ひ。あ。は。木。真。み。淫。奪。あ。る。を。死。と。あ。ふ。滅。し。え。則。て
 諭。する。もの。あ。ら。う。と。憐。へ。と。と。う。主。ご。ま。ご。ま。我。憐。む。よ。
 皇天のゆる憐むらん。一月の恥辱を忍び。魂遠く大和を離れ
 臥す代。て。風流士の。宝刀の。往方。と。う。祈。求。め。て。進。む。る。の。は。
 忠孝共。よ。全。う。らん。その。と。死。よ。と。そ。舊。惡。の。浮。名。を。雪。る。池。に。
 魂魄。再。び。う。ま。る。一。宛。の。葉。子。の。因。り。て。い。づ。か。ま。ら。月。と。日。を。
 百日。千。日。累。る。とも。風流士。と。索。出。と。服。の。後。て。あ。ら。う。は。服。さ。る。と。

汝。法。を。犯。し。て。池。水。に。沈。ら。れ。た。ま。し。ひ。自。在。み。天。外。を。推。繰。る。宝。刀。の
 在所。と。あ。ら。う。の。あ。ら。う。生。か。す。ま。し。う。幸。あ。ら。う。は。や。又。す。ま。進。が。る。の。と。
 とも。か。く。も。君。と。縛。め。ま。り。て。羽。衣。の。幸。な。り。た。り。と。日。を。か。か。ら。ま。し。よ。と。
 彼。ホ。が。死。し。て。後。の。日。に。一。編。の。回。向。し。て。死。す。る。の。あ。ら。う。は。告。め
 ま。し。せ。よ。衆。婢。ご。ら。う。の。や。と。謎。よ。か。け。て。釋。し。る。縛。の。索。う。り。の
 る。肉。身。と。縛。る。思。義。あ。ら。う。面。り。折。る。う。り。の。不。拘。よ。ま。り。え。る。
 す。七。初。花。の。ば。ら。ら。も。曾。左。郎。の。只。徳。貫。の。尉。斗。月。の。袖。に。感。涙。を。
 畏。難。ま。り。列。居。る。女。房。達。は。女。の。童。女。と。あ。ら。う。の。終。共。よ。坐。み
 袂。と。濡。し。たり。且。し。て。玉。枕。巾。前。の。女。の。童。女。齋。し。る。服。紗。物。を。開。て
 蟻。松。は。對。せ。の。い。や。よ。曾。左。郎。例。の。ど。く。辨。財。天。之。進。と。せん。と。て。齋。し
 たる。白。銀。十。枚。と。あ。ら。う。ま。ら。れ。ども。罪。人。は。觸。ま。ら。ん。が。う。骨。の。系。指。を

仕める人。さるとた。この白銀も撥き入り。彼も水中へ沈んま。壓石
うひてあがるべうら度。この白銀の究竟の壓石。兩人が袂へ納ま。
させよ。十万億土の遙き前途死て。冥土の路費とも。あまきものぞ。
と外しく。法施の銀を曾太郎お。どらう。又宣ふやう。彼も既ふ罪
定ま。死するのふ異るべ。人々。冥期の念よ。うけて。永く生を
替へとるや。云号する。婦夫の縁。と。今生に結ぶ果。と。未だ孤独の
餓鬼とるのり。あん。死後と。と。今許と。婚姻の盃。せ。三三九品の
浄土に生せん。この此方を酒は擬へ親も許して。召さ。と。仰せ。が
曾太郎の面を背けて。鼻う。らう。も。這奴ホ。の。つ。る。る。月と。目。の下。ふ
生。ま。て。か。く。ま。で。よ。高。知。恩。恵。と。受。る。ら。ん。推。辞。な。も。ん。の。物。伴。は。
冥加よ。あ。なる。罪。人。の。り。と。恋。さ。う。せ。が。腰。婢。の。る。龍。田。言。石。か。こ。ろ。

え。て。女。の。爪。ま。の。淨。子。淨。柄。杓。と。長。柄。副。柄。あ。で。婿。女。と。結。ぶ。
水。觴。言。祝。せ。後。と。娘。の。松。風。の。音。よ。夜。の。深。く。玉。枕。を。さ。し。て。
現。れ。つ。ら。れ。た。妻。婦。の。か。つ。て。入。迷。つ。て。弘。果。と。召。る。ん。や。曾。太。郎。長。
會。談。し。て。更。蘭。と。う。この。罪。人。お。め。り。ら。う。も。お。彼。知。の。卷。う。う。沈。身。お。
彼。よ。さ。う。う。ん。お。形。の。巖。お。打。中。骨。と。碎。か。る。う。く。お。ち。ら。ふ。ん。
舟。の。見。當。と。た。ぐ。る。と。仰。さ。う。の。彼。舟。よ。お。せ。よ。と。あり。と。睡。り。つ。
ま。か。る。狀。の。良。い。れ。ん。と。初。花。の。う。ち。仰。ご。う。は。せ。も。り。後。共。よ。
今。を。嘗。へ。主。と。親。と。お。辞。別。物。い。ひ。と。紙。の。つ。ば。え。よ。船。者。樟。舟。の。流。し。
雞。襟。上。左。右。は。搦。廻。む。曾。太。郎。の。あ。や。や。あ。卷。う。う。殿。と。衝。落。と。あ。
底。ま。る。ぬ。船。の。中。自。張。さ。え。よ。投。入。ま。て。浪。の。ま。り。推。流。せ。が。玉。枕。出。前。の。
おん。声。さ。う。く。罪。人。ホ。が。死。骸。浮。あ。が。る。再。び。卷。へ。う。る。と。あ。ん。曾。太。郎。の。

夜の中水門を開く。下校川の流る。いざ知らん。と徐々
中床几をまきせり。銀燭画燭續うえて。子あく抗る燈火。本
冊く影の女房。前驅後従中嬪。やまらるる。びやく夜の花
中。強顔蟬松。易ぬ操。子狐棄る。浮世の藪。や行極の樞。中樞
中。隔移。闇の善悪。船の中。月送る。す七初花。火光。目當。中
中。洋々。教養。舟と。水。往方。更。定。秋。の。夜。長
歎く。あふ。

白夢南柯後記卷之四終

是篇とて。脚色許多あり。姑く第八卷。子至。て團圓とて。
あんなにも。匠人巧を。終る。を待。年。の暮。あんなに。紙厭。とて。
覺て。今。この。四卷。を。先。み。度。あんなに。下。笠。松。平。船。が。事。夏。山。
平。右。郎。母。子。の。と。刀。屋。同。樹。が。貪。婪。毒。計。半。七。お。花。が。艱。難。
危。窮。槐。姫。の。生。死。存。亡。四。五。六。全。女。が。善。悪。邪。正。花。比。丘。尼。
清。果。の。縁。故。陶。五。郎。が。陰。德。赤。根。氏。お。通。祈。兩。の。歌。を。詠。とて。
小。野。小。町。よ。比。ら。る。る。順。啓。主。従。大。江。家。小。澤。とて。晴。賢。
退。治。の。出。陣。や。て。つ。た。な。に。後。快。四。卷。み。え。とて。前。快。とて。
叢。見。の。後。遠。く。ら。ば。く。と。油。を。呈。さ。す。翼。く。お。賜。顧。の。着。官。
前後の編を披閱し。高評をたまふ。

書賈

木蘭堂平吉欽白

飯台曲亭馬琴戲作 

葛飾北齋辰政畫 

做書

嶋岡節亭
鈴木武筍

剗刷

朝倉伊八
木村加兵衛

三七全傳南柯夢

馬琴著
北齋画
全六冊

三七全傳
第二編 占夢南柯後記

右二同
前帙四冊

同後快第三編四冊

近日賣出 申儀

旬 殿 實々記

馬琴著
前編五冊
豐廣画
後編五冊

や ち 友 さ り

馬琴著
春亭画
全五冊

朝夷嶋めぐりの記

曲亭主人編述
未壬申冬刊行

あさひるま
この草紙と鎌倉太田屋とさるくさるせりと朝夷三郎義秀
剛割ふして論入とさる。當中小生入せしむ。速保乃たト免
私田合戦のつた。義秀ひとり必死を脱せ。由井廣らり
職し。諸島を歴たし。遂に不嗣於子園に至て武勇を
あつたせしむ。并に前將軍頼家卿伊豆の修善寺に
自叙の額末といとあられど綴りあり。凡上中下篇一
十八冊を全本とす。上篇六冊。未申の冬より出。ゆひ

